ひとつ、〇略中淺黄の帽子、刺櫛、加賀笠は三日喰でも身をはなさず云々、また色縮緬享保三年印本卷之三に、こうとうなる仕出し、〇略中渡りまうるの中ぐけ帶、胸高に結び、加賀笠に紫縮めんの帽子云々、これらにて、流行たるを知るべし、さて此笠、延享の頃廢せし歟、茶物語享保十九年著述明和の頭書に、加賀笠〇略中延享年中以後、此笠すたりて、今より明和中をさす見れば、振袖に前帶して、加賀笠著たるは可笑事なり云々、とあればなり、

〔好色一代女三〕調謔歌船

比丘尼はおほかた淺黄の木綿布子に、龍門の中幅帶前結びにして、黑羽二重の頭かくし、深江のお七指の加賀笠、うね足袋はかぬといふことなし、

〔總見記二十一〕爆竹興行附自異國黑坊主來朝事

同十五日〇天正九年正月中略、御馬場入ノ次第、御先へ小姓衆、其次ニ大臣家〇織田信長御出馬、黑色ノ南蠻笠ヲ召サレ、〇略下

以用法爲名

〔四季草秋道具〕日でり笠は、あやゐ笠（藺草にてあみたる笠なり、笠の上に角の如くに筒をあみ作るなり、此筒の中へ本どりを入べき爲なり）を用たり、後三年合戰の繪、其外古畫に見えたり、かぶらざる時は、手に持するなり、

〔延喜式五齋宮〕造備雜物〇略中

笠二枚一日笠一雨笠

〔仲資王記〕元久元年十二月十日裏書、辰刻許、鎌倉少將實朝室、前大納言信清卿女子下向也、於中山卿三位亭有出立、〇略中其次第、〇略中次主人輿、〇略中次少將忠清朝臣狩裝束、相具笠引馬等也、早同侍十餘人歟、

〔吾妻鏡二十七〕安貞二年七月廿三日、將軍家〇藤原頼經渡御駿河前司義村田村山庄、是爲遊覽田家秋興也、辰刻出御、御水干被用御輿、自金洗澤邊御騎馬、奉御日旱笠（ヒデリガサ）、

〔嬉遊笑覽二中器用〕もみぢ笠（傘にもこの名あり、〇略中）紅葉笠とはひでり笠の義にや、懷子集玄ぐれてぞかしけ